

天理市埋蔵文化財調査概報

(1991 年度国庫補助)

長寺遺跡 (第5・6次)
大和古墳群・クリヤダ地区

1992

天理市教育委員会

序 文

本市は、豊かな自然と数多くの文化遺産にめぐまれた土地であります。

年々増加する埋蔵文化財の発掘調査は、より多くの遺産を残し、次の世代へ継承していく使命をもってつづけられています。

本書は、平成3年度に国庫補助事業として実施しました長寺遺跡と大和古墳群・クリヤダ地区の概要報告です。多くの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、調査にあたり、ご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

平成4年3月

天理市教育委員会

教育長 上 司 幸 男

例 言

- 1 本書は、奈良県天理市櫛本町に所在する長寺遺跡、同市萱生町・成願寺町に所在する大和古墳群・クリヤダ地区の調査概要報告である。
- 2 調査は、天理教育委員会が平成3年度に国庫補助を受けて実施した。
- 3 調査にあたって土地所有者をはじめ、地元の方々に多大な協力をいただいた。
- 4 調査と本概報の執筆は、天理市教育委員会・松本洋明が担当した。

目 次

長寺遺跡（第5・6次調査）

I はじめに	1
（1） 調査の契機	1
（2） 櫛本周辺の遺跡	3
II 第5次調査	5
（1） 基本土層	5
（2） 遺構	5
III 第6次調査	7
（1） 基本土層	7
（2） 遺構	7
IV まとめ	8

大和古墳群（クリヤダ地区）

I はじめに	9
（1） 調査の動機と現状	9
（2） 古墳群の景観	9
II 調査の概要	13
（1） 調査地点	13
（2） 断面観察	13
（3） 出土遺物	13
III まとめ	15

長 寺 遺 跡
(第5・6次調査)

I はじめに

(1) 調査の契機

天理市の北部に存在する櫛本は、奈良盆地の東山麓を南北に延びる旧伊勢街道（上ツ道）と盆地を東西に横断する旧竜田道（横田道）が交差する街道の要所にある。町並は街道筋に沿って家屋が集中し複数の垣内によって郷を形成していたが、現在では JR 桜井線の櫛本駅を中心に町並が広がっている。城下町として発展した柳本、市場町として展開した丹波市と並び天理市でも規模の大きな市街地を形成した櫛本は、かつて東大寺領の荘園が多く存在し、高瀬川の灌漑をはじめ荘園時代から既に農業開発が積極的におこなわれ、近世には東大寺の朱印地として発達した村落である。

市街地には JR 桜井線の櫛本駅と町の東側を県道奈良・天理線が走り、また名阪国道が接しているなど交通の利点から宅地の開発が目立ち、近年は長寺遺跡に関する発掘調査がおこなわれている。5次、6次調査も櫛本・瓦釜地区の個人住宅建築に伴う調査である。

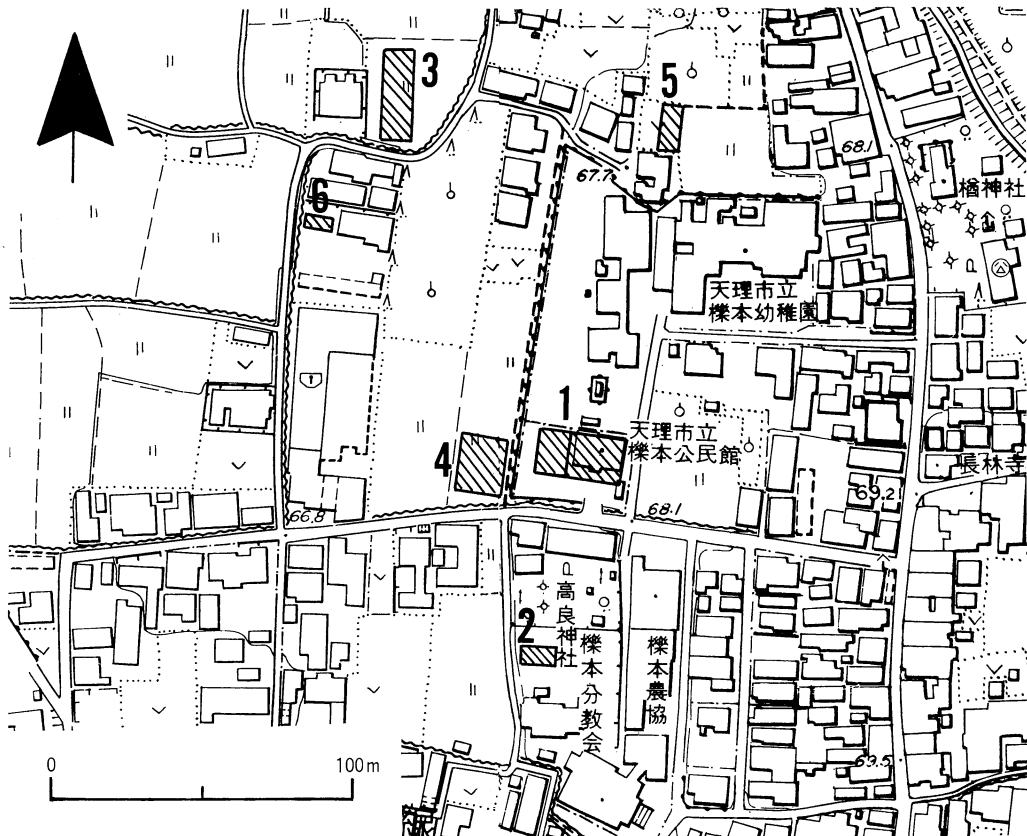


図1 長寺遺跡の調査地点 (S1/2500)

1～6は調査次数

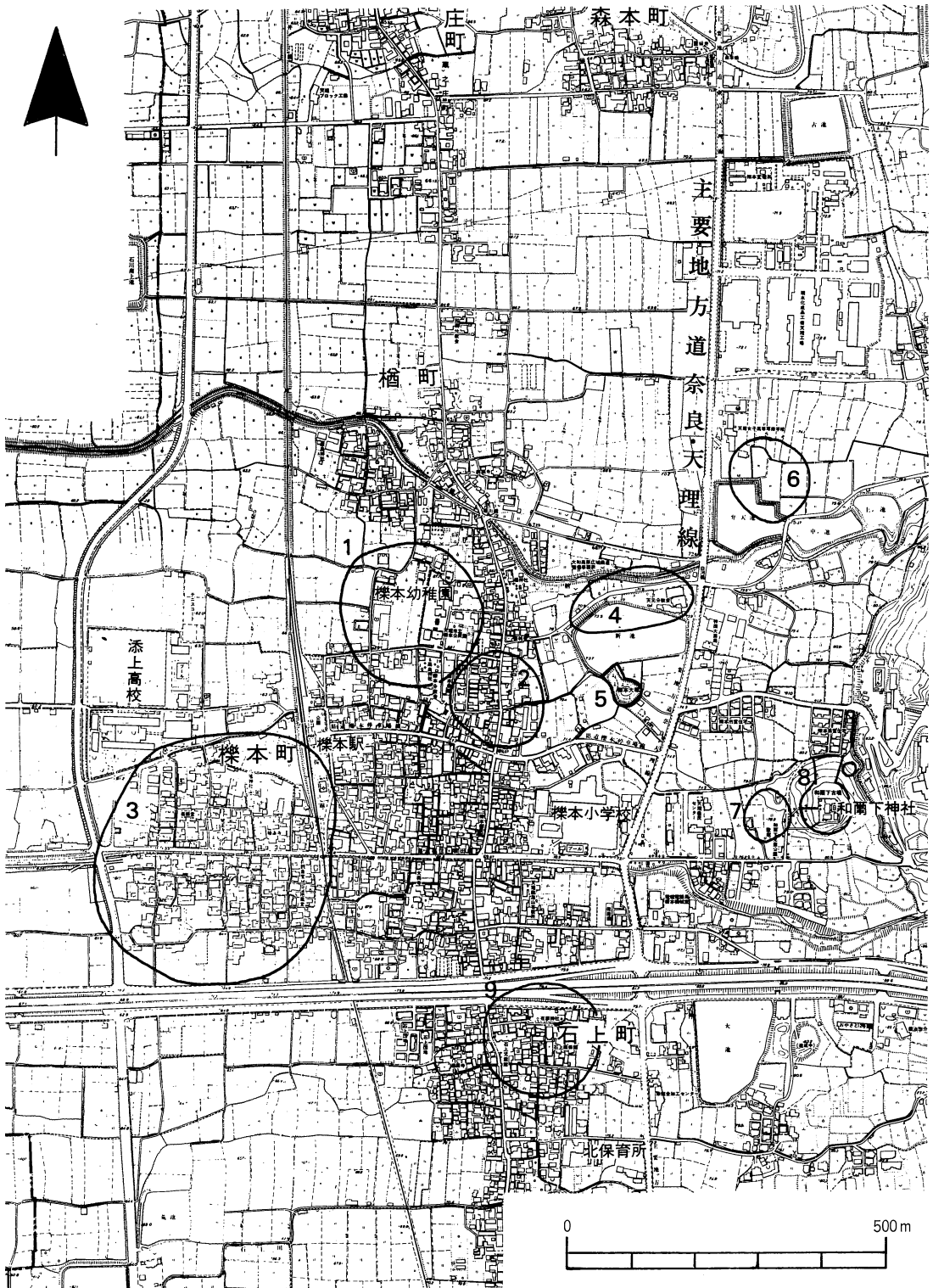


図2 長寺遺跡の周辺 (S1/10000)

- | | | | | |
|--------------|-------------|------------|---------|-----------|
| 1. 長寺遺跡 (廃寺) | 2. 散布地 (弥生) | 3. 榎荘中世集落 | 4. 散布地 | 5. 榎本墓山古墳 |
| 6. 檀池廃寺 | 7. 柿本廃寺 | 8. 和爾下神社古墳 | 9. 在原廃寺 | |

(2) 櫛本周辺の遺跡

A) 弥生時代

長寺廃寺や在原廃寺などの寺院跡の所在が櫛本で知られているが、近年の調査では長寺廃寺に重複する弥生時代の集落跡が確認されつつある。

特に長寺廃寺の中心部が推測されている高良神社の北側、櫛本町公民館地点（長寺1次）やその西側隣接地（長寺4次）、榎ノ前地区（長寺3次）では弥生時代中期（大和第Ⅲ～Ⅳ様式）の土坑や溝、谷筋地形に伴う自然流路を検出し、遺構や包含層に伴って多量の弥生土器が出土している。おそらく長寺廃寺に重複する状態で扇状地に立地した集落が存在していたものと推測され、現状では分かりにくいですが当時はかなり起伏のある地形で集落の中を谷筋が流れていたことが判明している。今のところ環濠に匹敵するような大溝を確認していないが、遺跡の範囲はさらに広がることが考えられる。

B) 古墳時代

市街地の東側には盆地の山麓から派生する比高 50 m 前後の低丘陵（東大寺山）が広がり、丘陵頂上部に立地する東大寺山古墳、丘陵の裾に立地している和爾下神社古墳、丘陵の南面、高瀬川に面する赤土山古墳など 100 m 級の大型前方後円墳や後方墳を中心とする古墳時代前期、群集墳を形成する古墳時代後期にかけて東大寺山古墳群は展開する。また櫛本の市街地では長寺3次調査で古墳時代中期後半の埴輪が伴う古墳の掘り割りと考えられる大溝や、長寺4次調査では庄内期に並行する大型円墳と推測される大溝（堀）を検出し、東大寺山古墳群が丘陵地帯だけでなく裾野まで広範囲に古墳群を形成していたことが判明しつつある。

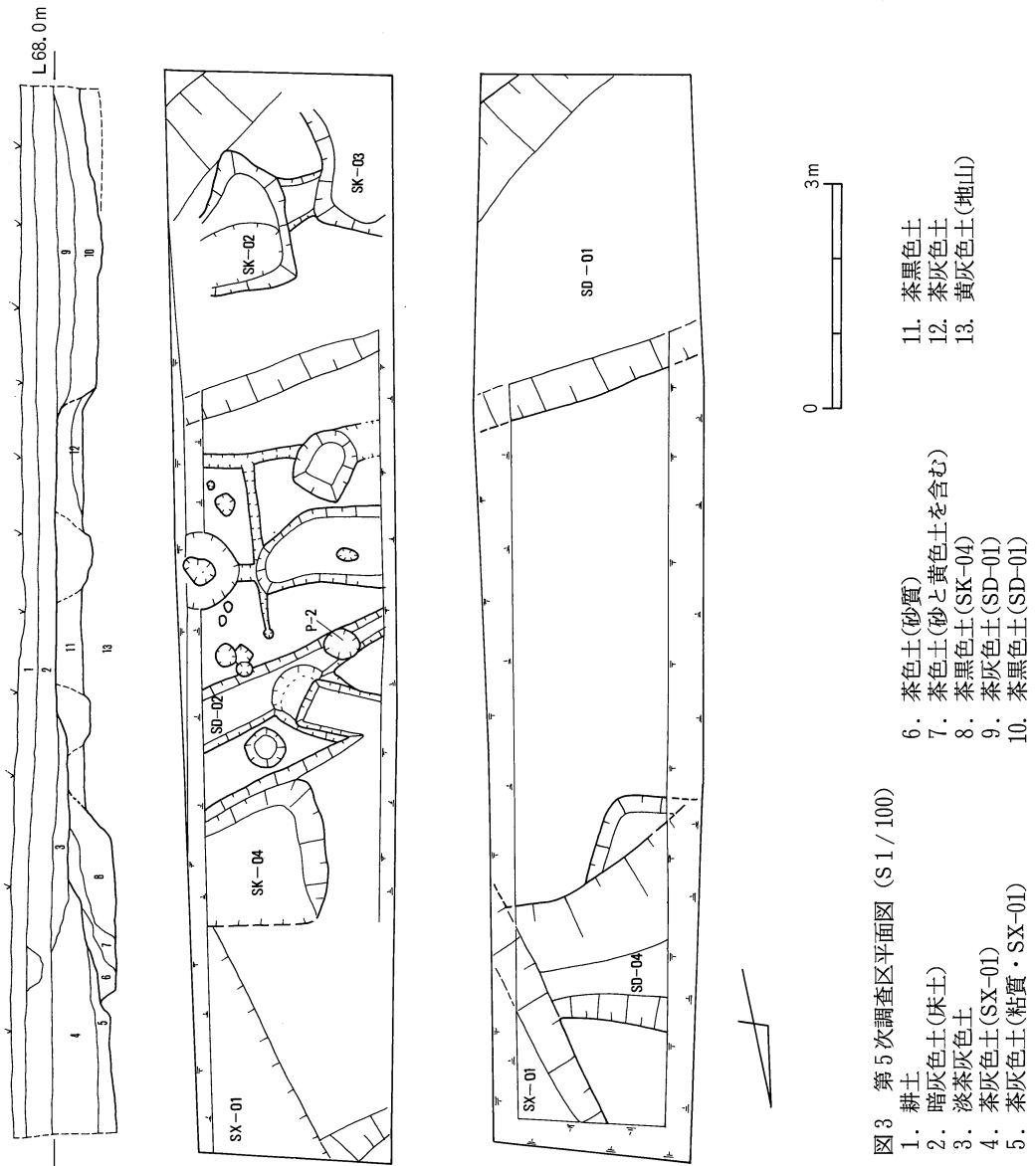
C) 奈良時代

長寺1次調査では多量の瓦とともに規模の大きな掘立て柱の跡が検出され、長寺廃寺の存在とその主要な建物跡であることが考えられている。また高良神社境内の調査（長寺2次）では包含層からおびただしい瓦片が出土しており、隣接する1次調査地点とともに寺域の中心部が位置しているものと推測される。ところで古墳群の形成が推測される長寺遺跡では1・2次調査地点に接する4次調査地点で庄内期の大型円墳を検出し、平安時代（10世紀頃）まで堀の落ち込みを検証している。中心部とはいえ長寺の寺域内には、多数の古墳が存在していたものと考えられる。

D) 中世

JR 桜井線の西側、竜田道を挟んで東五条五里六ノ坪、七ノ坪、東六条五里一ノ坪、十二ノ坪にかけて平安時代後期から中世前期にかけて集落が存在していた。東大寺領と興福寺領を主体に展開していた櫛本の荘園集落として文献史学においてはあまりにも有名である。四ノ坪・南小路・膳史垣内に位置する中世集落の地点は、現在でも櫛本の中心部にあたる。当時の集落形態は名主屋敷の散在が指摘される若槻荘のような散村に対して、名主屋敷が一定の範囲に集中しながら村落を形成する池田荘のような集村（疎塊村）があり、櫛本の集落は池田荘に類似していた。JR 桜井線の東側に

は興福寺の末寺になっていた長寺が所在し門前町的な様相が指摘される。中世後期には多数の垣内
 が出現し郷村として櫨本が形成している。



II 第5次調査

(1) 基本土層

東大寺山から延びる山裾に立地した長寺遺跡は、標高70 mから66 mにかけてのなだらかな傾斜で階段状の水田が開けた所に所在している。第5次調査地点はJR桜井線の樺本駅から北東へ300 mのところにある標高68.5 mの畑地で100 m²の敷地のうち長さ14.5 m、幅3 mの調査区を南北に設定した。耕土(図3-1)の直下には20~30 cmの幅で暗灰色土層(図3-2)があり、耕土の上面からおよそ50~60 cmほどの深さで暗茶色土層(図3-11)の弥生土器包含層を検出する。暗茶色土層はおよそ30 cmほどの幅で堆積し、同層の直下には黄褐色土(図3-13)の地山にいたる。遺構は暗茶色土層中から検出し、特に古墳時代以降の遺構は検出が容易であったが、弥生時代の遺構は同層からの検出が難しく地山の上面で検出をおこなった。実質的には暗茶色土層が弥生時代の生活面にあたるものと推測される。

(2) 遺構

遺構の検出は暗茶色土層の上面から容易に確認できた古墳時代から奈良時代の遺構と、同層からすでに遺構に伴って土器が出土しながらも確認が難しく地山まで掘り下げて検出した弥生時代中期の遺構に区別でき、古墳時代から奈良時代にかけてを上層遺構、弥生時代を下層遺構の2時期に大別できる。

A) 上層遺構

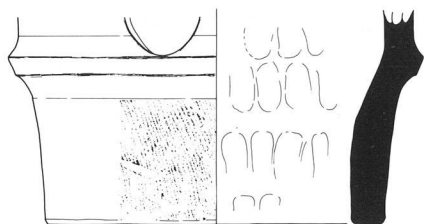


図4 SD-01 底面出土の埴輪底部(S1/4)

SD-01 調査区の南端で検出した推定幅4~5 m、検出した深さ50 cmの東西に延びる大溝状の遺構である。遺構内には暗茶色系の土壌が堆積し、土層中から弥生時代中期(大和第三~IV様式)の土器片が多量に出土している。しかし遺構の床面から古墳時代後期の円筒埴輪底部(図4参照)が出土し、弥生土器は混入であることが判明した。長寺3次調査でも古墳時代中期の埴輪が伴う古墳の堀と思われる遺構を検出しているが、この大溝も埴輪の出土を重要視して古墳に伴う掘り割り跡と考える。

SD-04 調査区の北端で検出した幅2~3 m、検出した深さ60~70 cmの東北に延びる溝状の遺構である。遺構内には暗茶色系の粘質土が堆積し多量の弥生土器片が出土している。しかし数点の杯形土師器(図5参照)が出土したため弥生土器の混入であることが判明し、土器の特徴から7世紀代の遺構と推定される。長寺廃寺から100 mほど北へ隔てるが、長寺3次調査でも谷筋に堆積した7世紀代の土器類を含む包含層を検出しており、遺構の性格は明らかでないが廃寺に伴う遺構である可能性が考えられる。

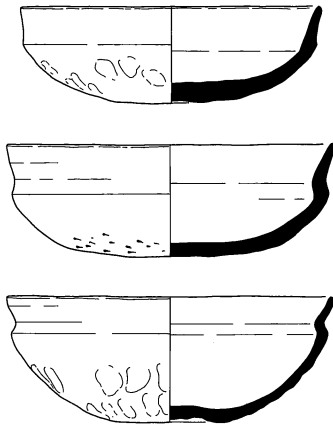


図5 SD-04 出土の土師器坏 (S1/3)
 SX-01 調査区の北端で検出した深さ1 mほどの落ち込みで、溝遺構と思われるが定かでない。遺構内は下層に暗茶色系の粘土層が堆積しSD-04を切り込んでいる。出土した土器片から遺構の時期を求めるのは難しい。

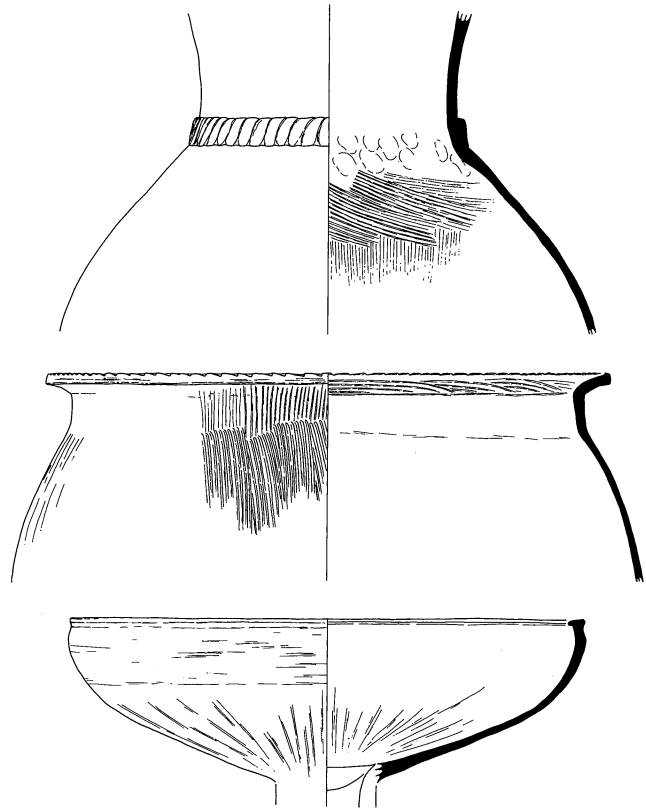


図6 P-2 出土の弥生土器 (S1/4)

B) 下層遺構
 調査区の全面で顕著に弥生時代中期の遺構を検出した。大溝が目立つ上層遺構に比べて土坑やPit、小溝が目立つ下層遺構では豊富に土器片が出土している。上層遺構から出土している弥生土器も下層遺構の攪乱による混入と思われ、SD-01の床面から検出したSK-02・03はそうした削平をうけた遺構といえる。

遺構の密度や包含層から出土した弥生土器の様子から推測して、集落の中心部に含まれることが考えられる。また長寺3・5次調査地点は槽川が流れる北方へも傾斜した地形にあり、長寺遺構に伴う弥生集落が槽川を見る遺跡であったことが推測される。

Ⅲ 第6次調査

(1) 基本土層

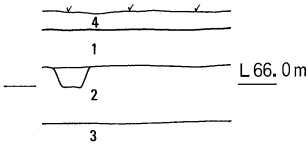


図7 第6次調査地点
基本土層 (S1/40)

JR 桜井線・櫛本駅から東側一帯に長寺遺跡が広がっている。6次調査地点は長寺遺跡が推定される西端部に位置し、標高66mの宅地造成地にあたる。調査の段階には10cmほどの盛土がなされていた。盛土前の水田に伴う耕土の直下には暗灰色土層が幅30cmほどにあり、耕土層の上面からおおよそ50cmほど下位で黄褐色土層(地

山)に到着する。地山の直上には土器を包含する暗茶色土層の堆積が長寺3~5次調査で確認されているが、6次調査では暗茶色土はない。

(2) 遺構

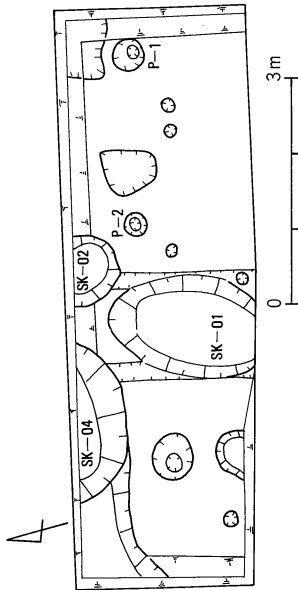


図8 第6次調査地区
平面図 (S1/100)

調査では黄褐色土層の上面まで掘り下げ、遺構の検出をおこなった。

SK-01 調査区の中央部で検出した長さ2m(推定)、幅1.5m、検出した深さ20cmの土坑で、遺構の性格は不明。遺構の埋土から7世紀代の土器類(図9参照)が出土している。

SK-02 調査区の中央部、北側壁面に接して検出した径1m、検出した深さ50cmの円形プランの土坑で、遺構の性格は不明。遺構の埋土から弥生時代中期(大和第Ⅲ~Ⅳ様式)の土器片がわずかに出土している。

SK-04 調査区の中央部、SK-02の西側で検出した長さ2.5m、検出した深さ50cmの楕円形プランの土坑で、遺構の性格は不明。遺構の埋土から弥生時代中期(大和第Ⅲ~Ⅳ様式)の土器片が出土している。

柱穴 調査で径20~30cmの掘り方が伴う掘立て柱の痕跡を検出している(P-1~2)。調査区の関係から建物の全体は不明だが、第6次調査地点では何らかの建物が存在していたものと推測される。長寺第3次調査で検出した10~11世紀頃に推測される家屋跡の柱穴と類似し、平安時代の後期頃の建物跡とも考えられる。またSK-01包含層から出土している土器に7世紀頃の遺物が目立ち、長寺廃寺に関わる遺構の可能性も推測される。

IV ま と め

長寺5・6次調査を通じて遺跡の様相がいくつか判明しつつある。

1) 第1次調査以来、長寺遺跡の一带では弥生時代中期のとりわけ大和第Ⅲ～Ⅳ様式の土器類と遺構が目立ち、弥生時代中期後半の段階で楢川に面した傾斜地形を利用して集落が発達していた様子が推測される。しかし弥生時代の集落を特徴づける環濠にかかるような大溝は確認していない。弥生集落が長寺遺跡の範囲を上回る公算で、長寺廃寺とは別に弥生集落としての遺跡範囲の確認が求められる。

2) 第3・4・5次調査を通じて同遺跡内においては古墳の存在が確認されている。初現期の古墳が存在する可能性もあるが、古墳時代中期から同遺跡の一带で古墳群を形成しはじめる。これまで丘陵地帯で古墳群の形成が求められてきた東大寺古墳群であるが、山裾への広がりについても改めて見なおす必要がある。

3) 瓦類や寺院に関わる遺構を検出した第1・2次調査に比較して廃寺の縁辺部に位置する第3・5・6次調査では瓦類の出土が極めて乏しく、長寺廃寺の中心部より隔てた感じをうける。しかし3・5・6次調査を通じて7世紀頃の土器類が遺構に伴って出土しており、寺院に伴う関連遺構の存在が十分に想定される。

4) 疎塊村的な集村型の集落で知られている中世・櫛荘の村落は、竜田道の両側に沿ってJR桜井線の西側一带に集落が所在していた。第3次調査で検出した10～11世紀前半にかけての井戸が伴う屋敷跡は建物の規模も大きく、そうした櫛荘の集村型集落が成立する直前の村落を考えるにおいて重要な資料で、古代から中世にかけて集落がどのような展開を見るのか、興味深い問題である。

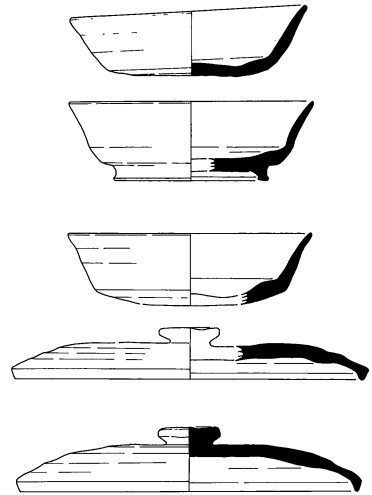


図9 第6次調査包含層
出土土器 (S1/4)

大 和 古 墳 群
(クリヤダ地区)

I はじめに

(1) 調査の動機

天理市の中南部、竜王山系の山麓に展開する大和古墳群は、佐保庄町から中山町におよぶ南北 1.2 km、萱生町・中山町を山側にして兵庫町・成願寺町・新泉町・岸田町にまたがる東西 1.4 km の範囲に及ぶ。上ツ道に重なって旧伊勢街道が古墳群の中を南北に横断していたが、昭和 23 年には県道天理・桜井線が新たに古墳群の中央部に敷設され、近年はこの 2 本の幹線道路を中心に宅地造成が広まりつつある。かつて前方後円墳の形態を残していた栗塚古墳(図 1-20)は県道の敷設後、沿道に家屋が建てられ、その際に前方部が削平を受けている。また波多子塚古墳(図 1-13)の西方にあるマバカ古墳(図 1-14)はくびれ部に通じていた農道を車幅に応じて削平し、現在では前方部と後円部が切断されている。街道筋に沿う馬口山古墳(図 1-18)やフサギ塚古墳(図 1-21)は成願寺町の集落に位置し、家屋の建築に伴って攪乱を受け墳丘の原形をすでに失っている。あるいは旧国鉄・桜井線の敷設にともなって弁天塚古墳(図 1-25)の墳丘が土取に利用され大きく原形を失い、平塚古墳(図 1-22)やマトバ古墳(図 1-24)など大型円墳も輪郭を地形に残すのみで、墳丘がない。また矢矧塚古墳(図 1-23)は戦時中の軍事施設に利用され、墳頂部が大きく破壊されている。出現期から前期にかけて大型古墳群を形成した大和古墳群は特種な墳形をもつ古墳が際立ち、しかも山麓で起伏の激しい地形を利用した立地条件など、墳丘の原形と地形的景観の保持は同古墳群の歴史的様相を探る貴重な条件といえる。しかしこれまでに市街化調整区域で覆われていた大和古墳群が、都市計画の整備に伴い JR 桜井線・長柄駅を中心とする市街化計画が求められ、開発が強まるきざしにある。

マバカ古墳の南方、クリヤダ地区調査地点には墳丘状の高まりを残した畑地がある(図 2-5)。調査は住宅建築に伴って事前に実施したものである。

(2) 古墳群の景観

西殿塚・東殿塚古墳(図 1-2・3)を主体に展開する大和古墳群は、柳本古墳群、纏向古墳群とともに奈良盆地東南部の山裾に形成された古墳時代前期の大型古墳が群集する地帯である。200 m を越す巨大古墳(箸墓)が単独で立地される纏向古墳群。平野部に前方部を向け、山側には特殊な墳形をもつ大型古墳 1 基ずつを配した(楡山古墳・シウロウ塚古墳) 2 基並立の巨大古墳(行燈山古墳・渋谷向山古墳)を中心に、大型古墳が群在する柳本古墳群。南方に前方部を向けた巨大古墳(西殿塚古墳)とその山側に大型古墳 1 基(東殿塚古墳)を並列で配置し、両古墳を主峰にして平野部に向かって放射状に多数の大型古墳が群在する大和古墳群など、群をなす大型古墳と核になる巨大古墳の立地や配置関係には、それぞれ古墳群によって個性的な形態をなしているが、逆に群を通じて相関関係を感じさせる配置形態も認められる。

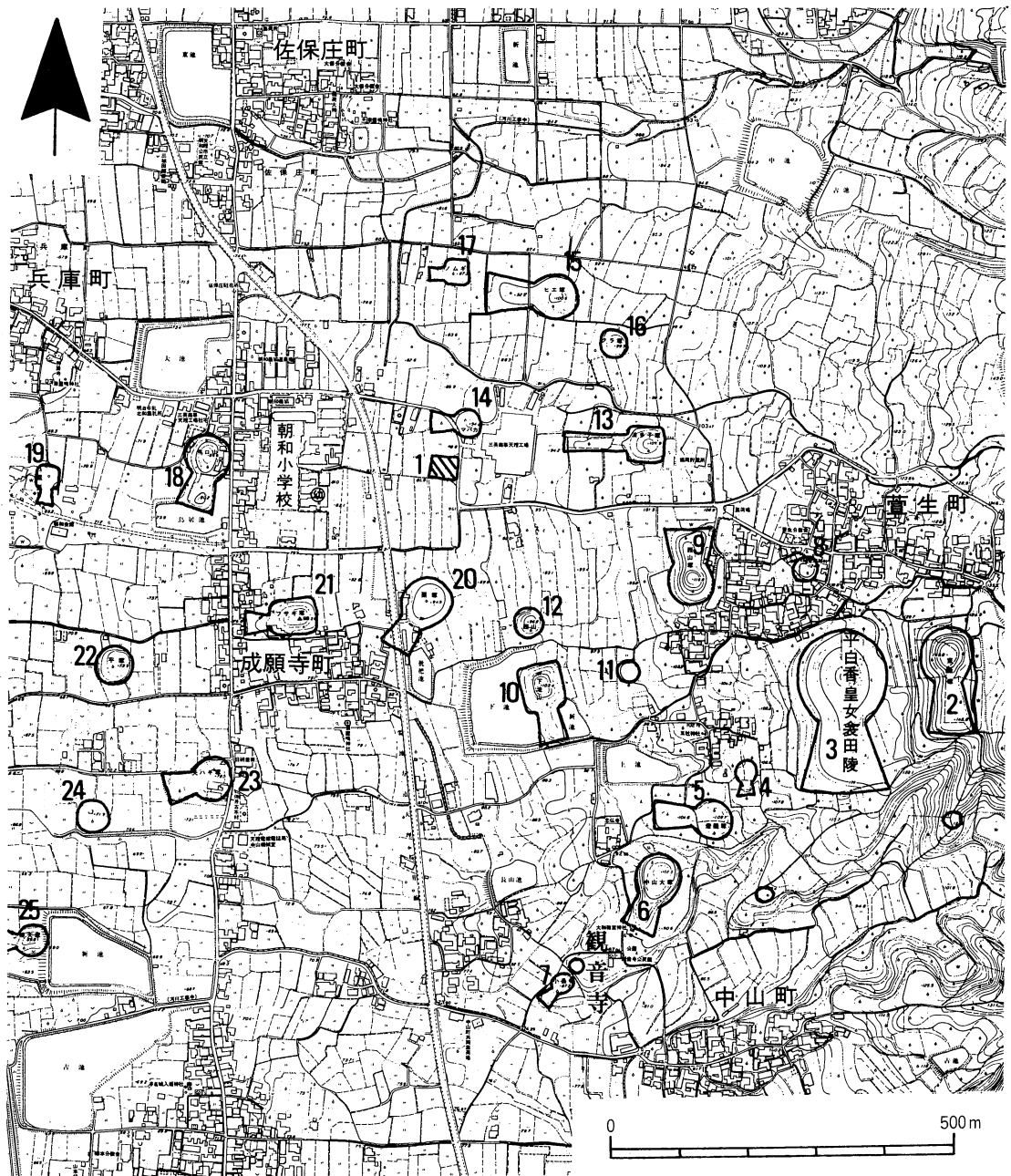


図10 大和古墳群・配置図 (S1/10000)

- | | | | | |
|-----------|-----------|-------------|-----------|------------|
| 1. クリヤダ地区 | 6. 中山大塚古墳 | 11. ホツクリ塚古墳 | 16. クラ塚古墳 | 21. フサギ塚古墳 |
| 2. 東殿塚古墳 | 7. 小岳寺塚古墳 | 12. 西ノ山古墳 | 17. ノムギ古墳 | 22. 平塚古墳 |
| 3. 西殿塚古墳 | 8. 空路空山古墳 | 13. 波多子塚古墳 | 18. 馬口山古墳 | 23. 矢矧塚古墳 |
| 4. 火矢塚古墳 | 9. 西山塚古墳 | 14. マバカ古墳 | 19. 星塚古墳 | 24. マトバ古墳 |
| 5. 燈籠山古墳 | 10. 下池山古墳 | 15. ヒエ塚古墳 | 20. 栗塚古墳 | 25. 弁天塚古墳 |

大和古墳群の場合、西殿塚・東殿塚古墳を主峰に並立する下池山古墳（図1-10）と、西殿塚古墳の前方部から延びた尾根筋上に沿って火矢塚・燈籠山・中山大塚・小岳寺塚古墳（図1-4～7）が群を構成する一群（南支群と呼ぶ）。一方では波多子塚古墳（図1-13）を筆頭にヒエ塚・ノムギ・馬口山・栗塚・フサギ塚・矢矧塚・弁天塚古墳を要する一群（図1-13～25・北支群と呼ぶ）に大別でき、2種に群構成が区別できる。南支群は全長220mの西殿塚を主墳にして山側に東殿塚を配して古墳群の主体をなし、燈籠山・中山大塚古墳など配列した尾根筋には西殿塚の陪塚的な様相が見られる。たとえば南支群の様子を柳本古墳群に比較すると、行燈山古墳や渋谷向山古墳の山側に配列されている櫛山古墳やシウロウ塚古墳が東殿塚に対応し、前方部に面し培塚に位置づけられるアノ山・天神山古墳や上の山古墳は燈籠山・中山大塚古墳などに対応する。つまり巨大古墳に関わる支群構成が大和古墳群と柳本古墳群の間で共通している。さらに北支群の特徴は、波多子塚古墳を筆頭に北面へ展開するヒエ塚古墳、南面には栗塚・矢矧塚・弁天塚古墳が直線的に並び放射状の配置形態をなしている。そしてヒエ塚にはノムギ古墳、波多子塚にはマバカ古墳、さらに西方で馬口山と星塚古墳、栗塚にはフサギ塚と平塚古墳、矢矧塚にはマトバ古墳、弁天塚にはその西方で古墳の推定地点があり、放射状に配列された大型の前方後円墳それぞれに伴う東西並びのおしどりの古墳の配列関係をみることができる。特に特殊器台や円筒埴輪の出土例が知られている南支群に比べると、北支群では波多子塚古墳や馬口山古墳で特殊器台や埴輪の採集例が知られているが、他の古墳には埴輪類の出土例がなく、墳形も波多子塚古墳やノムギ古墳など前方部が特異な形態をしているものがあり、北支群と南支群とでは違いがある。柳本古墳群の西部、上ツ道に沿って点在する黒塚・石名塚・柳本大塚古墳や巻向古墳群に含まれる東田支群は大和古墳群・北支群との対応関係が考えられる。盆地東南部に形成された前期古墳群の出現には、巨大古墳と大型古墳群の形成に密接した様相と展開が求められる。



1. ノムギ古墳 2. ヒエ塚古墳 3. マバカ古墳
 4. 波多子塚古墳 5. クリヤダ地区・調査地点

図11 調査地点位置図 (S 1 / 2500)

II 調査の概要

(1) 調査地点

天理成願寺町の朝和小学校から東へ150 m、マバカ古墳の南側に近接した標高88 mの地点で、一辺がおよそ15 mの方形に区画された比高1.5～2 m前後の古墳状の隆起があり、現状では柿畑として果樹園に利用されていた。調査の対象になった古墳状隆起が大和古墳群の中央にあり、古墳であった場合、前期古墳群の一基になる可能性もあった。宅地建築によって墳丘状の高まりが消滅することはないものの、隆起部分の上面を直接利用して家屋を立てることから攪乱をうけることが予測された。そのため事前調査を実施したものである。調査では南北と東西に調査区を設定し遺構の検出をおこなった。

(2) 断面観察

調査では果樹園によって土壌整備をうけた土層(図12-1)を確認した。また果樹園をおこなう以前に激しい乱掘をいたるところで受け、著しいかく攪乱の痕跡(図12-8)を検出した。こうした攪乱に伴う土坑は砂利で埋め立てられている。攪乱坑には古墳時代から平安時代にかけて土器類(図13)が出土しているが、攪乱は現代のものと推測され、出土遺物は攪乱後の埋めもどしの際に混入したものと考えられる。

耕土上面より50 cm下位で茶褐色土層(図12-4)がある。同土層内から古墳時代の須恵器が出土しているが、他に新しい時代の遺物はみられず茶褐色土層が古墳時代に関わる包含層であることが考えられる。調査では同土層の上面において葺石状の痕跡を南側に面した裾部から検出していたが、同土層内から古墳時代の土器類が出土したため墳丘の可能性がなくなった。

また茶褐色土層の直下には淡茶黄色砂質土(図12-9)、の地山面へ続き、淡茶黄色砂質土層には出土遺物がない。よって地山から茶褐色土層にかけては、盛土よりも調査地点に推積していた自然土壌的な様相が強い。

(3) 出土遺物

調査では古墳時代から平安時代にかけての土器類が出土している。

古墳時代の遺物は須恵器類(図13)が主で、わずかに庄内期～布留期に並行する土師器(低部破片)が出土している。須恵器類は後期～終末期にかけてのものが目立つ。出土状況はいずれも包含層に含まれていたもので、遺構に伴って出土したものではない。

また平安時代後期の黒色土器や土釜、須恵器壺(図13)も、わずかであるが出土している。

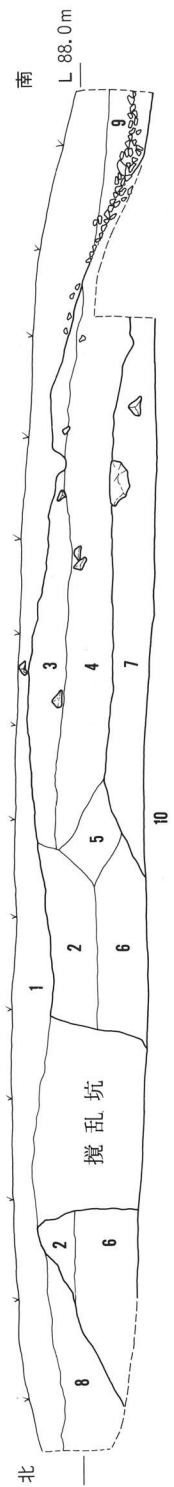


図12 調査地区南北断面図 (S1/100)

- 1. 淡灰色土(耕土)
- 2. 黒灰色土(パラスを含む)
- 3. 暗茶色土
- 4. 茶褐色土

- 5. 黒灰色土
- 6. 茶灰色土(砂礫を含む)
- 7. 淡茶黄色土
- 8. パラス

- 9. 淡黄灰色砂質土
- 10. 黄灰色砂質土(地山)

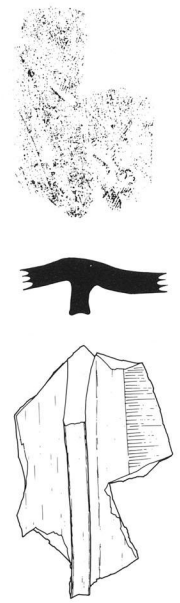


図14 クリヤダ地点・攪乱坑出土埴輪片 (S1/4)

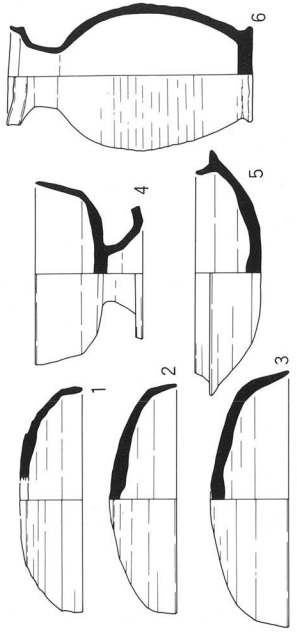


図13 クリヤダ地点出土土器 (S1/4)
1・2・4～6. 攪乱坑出土 3. 茶褐色土層

Ⅲ ま と め

マバカ古墳の南方に所在していた古墳状隆起（奈良県遺跡地図、11-B-316）は古墳でなかった。一段高くなったマウンドは階段状に区画された周囲の畑が耕地整理によって築かれた際、現状のままで残された旧地形の痕跡と推測される。そうすると調査したクリヤダ地点とマバカ古墳・前方部との間には40 mほどの間隔で落ち込みが存在することになり、同古墳の南側を区画した掘り割りの外郭を示す痕跡として考えることができる。マバカ古墳の場合、後円部の東側から南側にかけて工場用地があり、すでに掘り割りの痕跡がわからなくなっている。しかしクリヤダ地区の調査によって残存していた掘り割りの一部を再確認したことになる。



調査区全景（南から）



調査区全景
（南から）



弥生時代の遺構検出
(北西から)



弥生時代の遺構
(北西から)



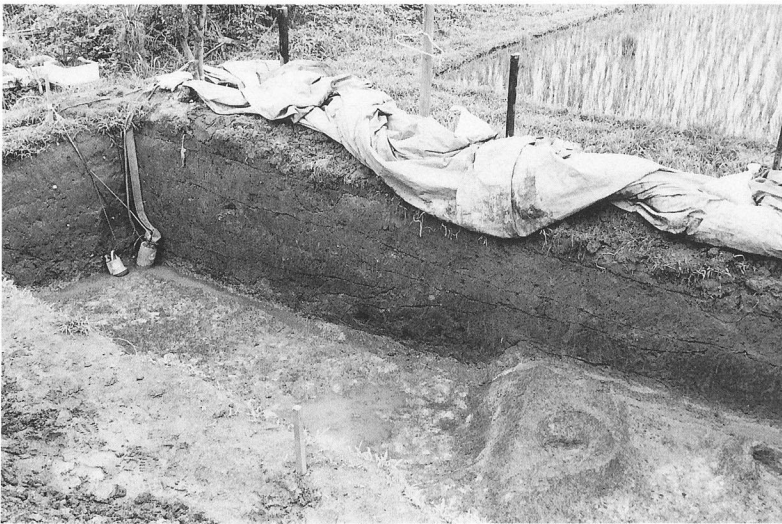
SD-01 (南から)



SX-01 (西から)



SD-04の検出
(南から)



SX-01・SD-04付近の
落ち込み断面 (西から)



調査区全景（西から）



調査区全景（東から）



墳丘状の隆起（南西から）



墳丘状の隆起（南から）



南北調査トレンチ（南から）



攪乱坑とバラス
（南から）

平成4年3月

天理市埋蔵文化財調査概報

長寺遺跡（第5・6次）

大和古墳群・クリヤダ地区

発行 天理市教育委員会
編集 天理市川原城町605番地

印刷 天理時報社
天理市稲葉町80番地